

The Winter's Tale における Mamillius の死と

16年間の欠落の意義についての一考察

村上世津子*

(平成19年10月31日受理)

The Significance of Mamillius' Death and the Absence of Sixteen Years in *The Winter's Tale*

Setsuko MURAKAMI*

Despite his subjects' unanimous opinion that Hermione is chaste, Leontes is suspicious of the relationship between his wife and the King of Bohemia. By telling his prince that his mother is a whore, he destroys Mamillius's innocence. Deprived of his innocence, he can no longer live as a child and dies. Leontes destroys his own innocence and becomes a tyrant when he kills his son's innocence: he orders his subject to take his baby daughter Perdita to some remote and desert place and leave it there. He even ignores Apollo's oracles and loses his wife and children. Only after he loses them, he recognizes his sin, and repenting of his sin, he leads a saint-like life for sixteen years. Luckily Perdita is found and taken care of by a shepherd and his son. Though Mamillius himself dies, his innocence survives in his sister. Seeing Hermione in Perdita, Leontes is reminded of her innocence. When he remembers his wife's innocence and tenderness, he chooses madness over sanity to recover her. He believes in Paulina's ritual like an infant, and when he does so, he recovers his own innocence and is reconciled with Hermione.

key words: innocence, infancy, Mamillius's death

はじめに

Sicilia 王 Leontes は彼の妻 Hermione と Bohemia 王 Polixenes の関係を邪推して臣下の一一致した意見はもとより Apollo の神託の言葉をも無視して Hermione に有罪判決を下そうとして神々の怒りを招き妻子を失う。妻子を失って初めて自分の罪に気づいた Leontes は16年間の長きに亘り贖罪生活を送った後に Libya 王女として紹介された Bohemia 王子 Florizel の恋人である羊飼いの娘が実は16年前に臣下の者に捨てさせた彼の王女 Perdita であることが判明する。さらに、死んだと思われていた Hermione も生

* 英語 准教授

き返り彼女と再会し和解することができる．とは言えこの劇の最後で Leontes の邪推が引き起こした全ての災難が解消するわけではない．王の命令に従って Perdita を捨て熊に八つ裂きにされた Antigonus は墓に埋葬されているし母の不品行を聞くと胸を痛めて元気も食欲も安眠も失って死んだ Mamillius も生き返らない Antigonus の死について Foakes は “not very important”¹⁾と述べ Harting は “becomes impersonalized both through the artifice of the bear and through the clown’s narrative manner”²⁾と述べている．しかし Felperin の指摘する³⁾ように彼の死は劇の終わりで彼の妻の Paulina に言及されているので簡単に片付けて良い問題ではない: “I, an old turtle,/ Will wing me to some withered bough and there/ My mate, that’s never to be found again,/ Lament till I am lost.”⁴⁾ Hunter や Ewbank らが指摘するように⁵⁾⁻⁶⁾ 2人の死は happy ending で終わる劇に暗い影を投げかけている．Antigonus は唯々諾々として王の命令を果たしたという Hunt の指摘⁷⁾に反して彼は Paulina とともに Perdita の命を助けようと画策し Perdita を助けるためなら何でもすると断言していた: “I’ll pawn the little blood which I have left,/ To save the innocent—anything possible.”(2.3.65-66)皮肉なことにも Antigonus に Perdita を捨てる命令が下されるのは彼の「何でもする」という断言を受けてのことである．Antigonus は Perdita を捨てたときに熊に八つ裂きにされるが Perdita は Bohemia の海岸に捨てられることによって羊飼いに拾われて養育され、そのことが結果的に Florizel 王子との出会いと結婚に結びついていく．すなわち Perdita は捨てられることによって助けられ Antigonus は結果的に彼女を救うことにつながる行為をしたときに命を失うから断言した通りを実行して Perdita の犠牲になって死んだと解釈することができる．問題は何故 Hermione の不貞(と思えたこと)とも Perdita の命とも直接的に関係のない Mamillius が死ななければならぬか、彼の死は何を意味するかである．

Mamillius の死と相前後して彼の妹の Perdita が生まれる．しかし彼女が子供(新生児)として舞台上に登場するのは Paulina に抱かれて Leontes の許に連れて行かれるときと Antigonus に抱かれて異国の地に捨てられに行くときだけである．その後「時」が一挙に16年間経過して次に彼女が登場するときには成熟した女性になっている．Mamillius の死と Perdita の誕生と16年間の経過の間にはどんな関係があるのだろうか．本稿ではこの関係に焦点を合わせて *The Winter’s Tale* を考察したい．

I

Mamillius の存在意義はまず第1に Leontes の跡継ぎであることである．彼は“the greatest promise”(1.2.39)という言葉で形容されているが彼が立派に成長していることは王国の将来の安定を保障するものであるから彼の成長は “physics the subject, makes old hearts fresh”(1.3.33-34)する．Mamillius の存在意義は単に彼が王位相続人であることに存在するのではない．Reid は、Mamillius は Leontes の “masculinity”を表すと述べている⁸⁾が Leontes は Mamillius を見て「大人のズボンもはかず腰につけた短剣も鯉口を止めてあった」子供時代を思い出すことから判断するとむしろ Mamillius は「子供」及び子供が象徴する “innocence”を表すと言えるだろう．Polixenes は Leontes と Polixenes の子

供時代について次のように述べている:

We were as twinned lambs that did frisk i'th'sun
And bleat the one at th'other. What we changed
Was *innocence* for *innocence*; we knew not
The doctrine of ill-doing, nor dreamed
That any did. Had we pursued that life
And our weak spirits ne'er been higher reared
With stronger blood, we should have answered heaven
Boldly, "not guilty", the imposition cleared
Hereditary ours. (1.2.66-74, emphasis mine)

上に引用した Polixenes のセリフに述べられているように子供は罪と無縁であることはもちろん罪が存在することすら知らない “innocent”な存在であるから親の「胸にわたかまる嫌な思いを癒してくれる」: “And with his varying childness cures in me/ Thoughts that would thicken my blood.”(1.2.168-69)命の根源である自分の母親が墮地獄の大罪の一つである不貞を働いたと聞かされると Mamillius は胸を痛めてすっかりやつれてしまう。Leontes は Mamillius の変化を知って “his nobleness”(2.3.12)と誉める。しかし子供は本来穢れを知らぬ存在であり心にわたかまることがないからいつも元気で食欲旺盛で夜はぐっすり眠れるのである。「がっくりうなだれ元気も食欲も安眠も失くしてすっかりやつれてしまった」姿は本来の子供と対極的な姿である。Hermione に有罪判決を下すために神託の言葉に反して Leontes が裁判続行を命じた直後に従者が登場して王子の死を告げるが Mamillius が肉体的に死ぬのはこの時点であっても罪の存在を知り「胸を痛めて思いに沈みすっかりやつれた」時点で Mamillius は子供として存在し続けることが否定されていたとすることができるだろう。

Mamillius の “innocence”を殺し彼が子供として存在し続けることを否定した Leontes は彼自身の “innocence”すなわち子供のように他者を信じる能力、換言するならば良心を殺し暴君と化していく。Leontes の頑なな心を動かすには「無邪気な沈黙」が一番だと信じる Paulina は Mamillius が劇半ばで死ぬのと入れ替わるように生まれた妹の Perdita を王の許に連れて行く: “The silence often of pure innocence/ Persuades when speaking fails”(2.2.40-41.)しかし Perdita が私生児にしか見えない Leontes は「無邪気な沈黙」に心を動かされるどころか「母親と一緒に火あぶりにしろ」と叫ぶ: “Hence with it, and together with the dam/ Commit them to the fire.”(2.3.94-95)そしてこの Leontes の言葉に従うものはなく Paulina も全く動じないのを見て取ると今度は彼女を火あぶりにしてやると言って脅す: “I'll ha'thee burnt.”(2.3.113)「お姫様の命をお救いするためなら何でもする」と言う Antigonus の言葉が功を奏して火あぶりは避けられるものの Leontes は Antigonus に Perdita をどこか異国の荒地に捨てに行くように命じる。Bohemia の海岸で Perdita を捨てた Antigonus は熊に八つ裂きにされて死ぬがこの熊は Biggins が指摘する

ように⁹⁾Leontesの“brutality”を表す。

異国の荒地に捨てられた Perdita は幸い羊飼い親子に拾われて養育される。彼女は Mamillius 王子が劇半ばで死ぬのと入れ替わるように生まれる。Mamillius が Leontes の子であるように Perdita も彼の子供であり Mamillius が Leontes と “as like as eggs”(1.2.129)であるように Perdita も “copy of the father”(2.3.99)である。そして Mamillius が “physics the subject, makes old hearts fresh”する存在であったように Hermione は “receives/ Much comfort in [Perdita]”(2.2.26-27)である。また神託は “the king shall live without an heir if that which is lost be not found”(3.2.132-33)と告げ Perdita が Mamillius に代わって王位相続者になることを示唆する。このように見ていくと Mamillius の役割はまさに Perdita に引き継がれ彼自身は劇半ばで姿を消すが彼の精神は Perdita の中に息づいているように思われる。しかしそう言い切るには一つ大きな問題が立ちだかっている。

II

Perdita が舞台上に最初に姿を現すのは2幕3場で Leontes の心を和らげるために Paulina が生まれたての Perdita を抱いて Leontes に見せに行くときである。次に登場するのは3幕3場で王の命令により Antigonus が彼女を抱いて捨てるに行くときである。Perdita は捨てられてすぐ同じ3幕3場で羊飼い親子に拾われる。ここまでの Perdita は生まれたての新生児であるがこの後舞台上の「時」は16年を飛び越え、4幕4場の毛刈祭りの場面で Perdita が登場するときには既に成熟した美しい女性に成長している。農夫に変装した Polixenes の王子 Florizel は毛刈祭りのために集まった客たちを証人にして Perdita に愛の告白をし手を取り合って婚約しようとする。なるほど Perdita の成長の過程を逐一舞台上で演出することは冗長である。新生児が成熟した女性に成長する長い年月が経過して始めて Apollo の神殿から神託を持ち帰った Cleomenes と Dion が5幕1場で Leontes は充分贖罪を果たしたと思い、将来の国家の安寧のためにも失われた血統の回復を図るためにも彼に再婚を勧める。この2人の意見とは反対に Paulina は Hermione を殺したのは Leontes だと主張することによって Leontes に彼の罪を思い出させる: “If one by one you wedded all the world,/ Or from the all that are took something good/ To make a perfect woman, she you killed/ Would be unparalleled”(5.1.13-16)。そしてさらに次のように付言する: “’Tis your counsel/ My lord should to the heavens be contrary, / Oppose against their wills.”(5.1.44-46)ここでこれだけ Leontes の罪と神託の言葉の成就を強調することは Paulina が Leontes の再婚に徹底的に反対しているように思える。しかし Paulina の次のセリフは彼女の言葉とは裏腹に彼女自身が Leontes の再婚について考え始めていることを示唆する: “yet if my lord will marry. . . give me the office/ To choose you a queen”(5.1.76-78)そしてこの劇の終わりで Hermione の石像を見せるために Leontes や Perdita を初めとする一行を彼女の家の礼拝堂に案内し、その石像を生き返らせることを考えると再婚を勧めるのは “when your first queen’s again in breath”(5.1.83)する時しかないと言うときに Paulina は既に Hermione と Leontes を再会させる潮時を模索している

ざる。換言するならば Perdita は穢れを知らぬ子供の象徴である Mamillius の役割を引き継ぐどころか悪魔になる可能性を秘めているのではないかという危惧が観客の脳裏を掠めるのである。実際5幕1場で Perdita が Florizel と一緒に Leontes の宮殿を訪れたときに彼女の美しさは応対に出た紳士をして彼が書いた Hermione 賞賛の詩の言葉を忘れさせたばかりか Leontes をして父上が反対されるなら Florizel の大事な御妃をもらいたいものだと言わしめるほどである。一体 Shakespeare は「時」に16年を飛び越えさせ Perdita を美しく成長した女性として登場させることによって生ずるこれらのリスクにどう対処しているのだろうか。

III

Perdita の美しさは Florizel 王子だけでなく彼女の姿を目にする者全ての心を惹きつけるがそれにも関わらず彼女が tempestress にならないのは1つには彼女の美しさが周囲の目を惹き付けても彼女自身の目が Florizel 以外の男性に向けられることはないからであり、もう1つは Florizel の恋人になるときに彼女の思いがあくまで Florizel 個人の人柄に向けられていて王子と結婚することによって社会的地位を上昇させたいということは夢想だにしないからである。むしろ “This your sheep-shearing/Is as a meeting of the petty gods,/ And you the queen on’t”(4.4.3-5)という Florizel の熱に浮かされた言葉と反対に Perdita は彼女の借り着が「お祭りにつき物」の “folly”(4.4.11)で “custom”(4.4.12)なのだと自覚し、身分の違いを乗り越えようとするどころか、常に違いを意識し農夫の姿に身分を隠し彼女を女神のように飾りたてる王子の「行き過ぎ “extremes”(4.4.11)」をとがめる。自分の姿を実際以上に見せかけて異性の注意を惹きたくないという Perdita の気持ちは Polixenes との間に交わされる有名な「自然対人工」の会話で暗示されている。Perdita は Polixenes に “nature’s bastards”(4.4.83)であるカーネーションと縞石竹は一茎だって欲しいとは思わないと言いその理由を “There is an art which in their piedness shares/ With great creating nature”(4.4.87-88)だからと説明するがそれは化粧した顔がきれいだという理由で Florizel に子供を生んで欲しいと言われたくないという彼女の気持ちと通底するものである。¹²⁾一切のごまかしを容赦しない Perdita のこの潔癖性は「金だと言われて卵を渡されれば決闘する」と言った Mamillius の子供らしい潔癖性とも共通するものである:

Leontes: Will you take eggs for money?

Mamillius:

No, my lord, I'll fight.(1.2.169)

父である国王に内緒で毛刈祭りに集まった客を証人にして Perdita と婚約しようとする Florizel の計画が見破られて Polixenes から激しく罵倒されたときの羊飼いと Perdita の反応は対照的である。羊飼いは青い顔をして次のように言う:

You have undone a man of fourscore-three

.....
Some hangman must put on my shroud and lay me
Where no priest shovels in dust. [To Perdita] O cursed wretch,
That knew'st this was the prince, and wouldst adventure
To mingle faith with him! Undone, undone! (4.4.432; 437-443)

Perdita も Florizel に会えなくなることについては悲しむが彼女は羊飼いのように入り乱しはしない:

Even here undone!
I was not much afeared, for once or twice
I was about to speak and tell him plainly
The selfsame sun that shines upon his court
Hides not his visage from our cottage, but
Looks on alike. (4.4.421-26)

確かに羊飼いは Florizel と Perdita に手を取り合わせる婚約の取り持ち役を買って出る。しかし Perdita は王子と婚約しようとする本人である。何故本人である Perdita の方が取り持ち役の羊飼いや平然としていられるのだろうか。羊飼いが “I cannot speak nor think, Nor dare to know which I know”(4.4.431-32)と思うのは娘が美しさの魔法で王子を虜にし王を欺いて極秘のうちに王子と婚約し皇太子妃になろうとしたのではないかと危惧するからである: “And thou, fresh piece/ Of excellent witchcraft, who of force must know/ The royal fool thou cop'st with.”(4.4.402-4)それに対して Perdita が平然としていられるのは彼女にはやましさがないからである。王子と別れなくてはならない寂しさは感じて彼女には常に身分の違いを意識し王子にそのことを警告してきたから王の叱責を恐れねばならぬ必然性を感じないからである。1幕2場で Hermione に子供時代の Leontes の様子を聞かれた Polixenes は “We were as twinned lambs that did frisk i'th'sun”と答えた。ここでの “lamb”は “innocence”の象徴である。成熟した女性である Perdita は “lamb”ではないが “lamb”と関係のある羊飼いの娘であることは面白い。

子供らしい “innocence”を形を変えて保持しているのは Perdita だけではない。羊飼いの娘という外面に囚われずに徳の高さで彼女を恋人に選び、極秘婚約に失敗した後でも王位継承権よりも愛を選ぶ Florizel の世俗的な地位や名誉に囚われずに真理を見抜く子供のような洞察力の中にも “innocence”が存在する。¹³⁾ “From my succession wipe me, father; I/ Am heir to my affection.”(4.4.460-61)羊飼いの娘との恋に落ちた Florizel は “princely exercises”を怠り羊飼いの衣服を身にまとうが Neely の指摘するように¹⁴⁾この変装はお祭りにつき物の “folly”と “custom”に則る実用的なものであるだけでなく Perdita との出会いを通して “innocence”を獲得したという意味において教育的であると同時に象徴的でもある。

「これからは二度と女王様のまねなどしない」と宣言した後も Perdita は Camillo の台本に基づき Florizel と駆け落ちして Sicilia に向かうのではないか。駆け落ちを成功させるためには見張りの目を逃れるために変装するし Florizel は Perdita のことを武勇の名の高い Smalus の娘だと紹介するのではないか。4幕4場の毛刈祭りの場面で Florizel が農夫のそして Perdita が女神の装いをしていたのはお祭りにつき物の “folly” と “custom” に則るものだとしても5幕1場で Leontes に Perdita の身分を偽って紹介するのは自分たちの立場を有利にするために Leontes を欺くことに他ならないではないかという反論があるかも知れない。しかしここで重要なのは4幕4場で Florizel と Perdita の極秘婚約計画が Polixenes に見破られて以降、彼らの行動は Camillo の台本に基づいていることである。Camillo はこの劇の初めで Leontes が Polixenes と Hermione の関係を邪推して彼に Polixenes 毒殺を命じたときに “with death and with/ Reward did threaten and encourage him”(3.2.160-61)したのに屈せず名誉を選び Sicilia に持っていた莫大な財産を捨て未知の将来に身を委ねた人物である。そのような高潔な人物が毛刈祭りで自分の目で Perdita の人物を確かめた上で Florizel が結婚するにふさわしい相手だと判断して結婚を勧め、そのための台本を用意することを見落としてはならない: “marry her,/ And with my best endeavours in your absence,/ Your discontenting father strive to qualify/ and bring him up to liking.”(4.4.510-13)Florizel の言葉に反して Perdita は王の娘どころか羊飼いの娘であることが判明した後でかつまだ Perdita が彼の娘であることに気づく前に Leontes が Florizel の頼みに応えて「愛の使者」として Polixenes を訪ねることを約束することも見落としてはならない。

IV

16年の経過は Leontes の贖罪と Hermione が Leontes の贖罪を受け入れる心準備に必要な歳月というだけではない。それは Leontes と Hermione を積極的に結びつける働きもする。5幕1場で Cleomenes と Dion が Leontes に再婚を勧めるときに Leontes は Hermione のことを忘れてはいないし、彼が犯した罪の大きさを悔やみ続けている: “Whilst I remember/ Her and her virtues, I cannot forget/ My blemishes in them, and so still think of/ The wrong I did myself.”(5.1.6-10)しかし “whilst I remember” という言葉は曲者である。この言葉は忘れうることを暗示しているからである。この場面で Paulina が Dion と Cleomenes に対して Hermione の卓越性と Leontes の罪の大きさを強調することについては先に述べたが彼女がそれらを強調しなくてはならないのは時間の経過とともに Leontes の中で Hermione の影が薄れていくのを感じるからでもある。しかし時は直線的に流れるだけではなく循環もする。Florizel の当初の説明に反して Perdita が羊飼いの娘にすぎず Polixenes から結婚の承諾を得られそうにないことを知ったときに Leontes は “Would he do so, I’d beg your precious mistress,/ Which he counts but a trifle.”(5.2.222-23)と言って Paulina にたしなめられる。Leontes は Hermione のことを思い出していたと言って弁解するが Leontes の言葉はまんざら嘘ではない。Leontes は

Florizel が Polixenes そっくりの面影をしているのを見て Polixenes 王妃の貞潔を賞賛するが Leontes と Hermione の間の子供である Perdita が Hermione を思い出させるのは当然のことである。ここで Leontes の目がかつての Hermione そっくりの面影をした Perdita に釘付けになることは Leontes が Perdita の中に Hermione を見て Leontes の心が再び Hermione に捕らえられたことを示唆している。

Perdita を見つめていて Paulina にたしなめられた Leontes は我に返り Florizel の頼みに応えるために Polixenes に会いに行き一同退場するがこの後すぐに続く場面の中で神託の言葉が現実のものとなり Florizel の恋人の羊飼いの娘が Leontes の王女であることが判明したことが紳士たちによって語られる。それが語られるだけで舞台上で演出されないことの効用の1つは Leontes と Hermione 再会の感動に焦点を合わせられることである。神託の言葉が現実のものとなった興奮が冷めないうちに Paulina が Hermione そっくりの彫像を所蔵していることを聞き及び、一行その像を見に彼女の礼拝堂に行く。Paulina がカーテンを引き像が呈示されると、それがあまりにも Hermione に生き写しであることに驚愕し一同言葉を失う。Hermione そっくりの像に見るものの目が釘付けされることは5幕1場で Leontes の目が生前の Hermione そっくりの Perdita の姿に釘づけになったことの一連の繰り返しである。Perdita の中に Hermione を見て Hermione への郷愁に駆り立てられた Leontes がここでもう一度 Hermione に生き写しの像を目にすることは Leontes の中で Hermione が生きて自分に近づいてくるような錯覚を生み出したことであろう。神託の言葉が実現し Perdita が Leontes の王女であることが判明する場面が語られるだけで舞台上で演出されないの観客はあたかも Leontes の目が生前の Hermione そっくりの Perdita に釘づけになったすぐ後で場所を変えて Paulina の礼拝堂で Hermione 生き写しの像を見せられたような印象を受ける。この配置は観客をしてその像が今にも生きて動き出しそうな気持ちにさせる。一同が驚嘆のあまり言葉を失っているのを見て取った Paulina が Leontes に感想を求めたときに彼はあたかも生きている人物に対するかのように石像に呼びかける：“Chide me, dear stone, that I may say indeed/ Thou art Hermione.”(5.3.25-25)そして石像の精巧さに驚いて言葉の出ない Perdita のことを次のように表現する：“There’s magic in thy majesty, which has/. . ./From thy admiring daughter, took the spirits,/ Standing like *stone* with thee.”(5.3.39-42; emphasis mine)Leontes のこの言葉は石像と血の通った人間、母と娘の境界をよりいっそう曖昧にし、それだけ観客に Hermione の像が生きているかも知れないという期待感を抱かせる。とは言え Hermione の像と Perdita の間には一つの大きな違いが存在する。Hermione の像に16年の歳月の経過を物語る皺が刻まれていることである。¹⁵⁾その違いはかえって Leontes をして今生きている Hermione の姿を想像させその想像が Hermione 喪失の痛みで Leontes の胸を刺し貫く。Hermione の像を激しく見つめ続ける Leontes に Paulina は “No longer shall you gaze on’t”(5.3.60)と言う。Paulina のこのセリフも5幕1場で Hermione そっくりの Perdita を見つめていたときに Paulina が Leontes をたしなめて言った言葉 “Your eye hath too much youth in’t”(5.2.224)の一種の繰り返しでありその2つの場面を結びつける。ただし5幕1場で Paulina にたしなめられたときに Leontes がすぐ

我に返ったのに対して5幕3場の石像の場面では Paulina の言葉に反して、またカーテンを閉めようとする彼女の動きを制して、Hermione の像を見つめ続けようとする。5幕1場で Perdita の中に存在する Hermione の面影を見つめていたときの Leontes の思いは若くて美しい娘に惹かれる気持ちと若かった Hermione に対する郷愁がない交ぜになった淡い感情であった。それに対して5幕3場で今生きている Hermione の姿の想像を掻き立てる「石像」を見つめるときの Leontes の Hermione 希求は激しく、狂気の領域にまで足を踏み入れている。Leontes にはその像が動くように見えるし息をしているように見えるし血管に本当に血が流れているように思う。なるほど冷静な傍観者である Polixenes も “The very life seems warm upon her lip”(5.3.66)であることには同意する。しかしだからと言って「石像は生きている」とは思わず “Masterly done”(5.3.65)という至極まっとうな結論に達する。それに対して Leontes には理性的な判断を下すことができない。Leontes はたとい石像を見続けることが彼の心を乱し正気を奪うにしても、この世のいかなる正気も Hermione が生きていると思う狂気の喜びにはかなわないと思う。狂気に足を踏み入れてまで Hermione を取り戻したいと思う Leontes の願望の強さを実感したときに Paulina は Leontes と Hermione の和解する時が到来したことを感じる。Paulina はまず彼女がこれからしようとする行為が悪魔の力を借りたものではないと思うことを要求する。次に像を動かさしやべらせるために「信仰心を目覚めさせる」ことを要求する: “It is required/ you do awake your faith.”(5.3.94-95) Paulina の言う「信仰心」は何のことを意味しているのだろうか。何故像を動かさしやべらせるために信仰心が必要なのだろうか。

ここで言う「信仰」は邪推とは対極に位置するものである。“knew not/ The doctrine of ill-doing, nor dreamed/ that any did”であった Mamillius の世界に属するものである。Leontes が石像に呼びかけるときに “infancy”という言葉を使っていることは重要である:

Chide me, dear stone, that I may say indeed
Thou art Hermione; or rather thou art she
In thy not chiding, for she was as tender
As *infancy* and grace.(5.3.24-27, emphasis mine)

Hermione は幼子ではない。しかし成熟した女性は “devil”になり “infancy”を失うというのはあまりにも単純化された女性観である。先に引用した Polixenes と Hermione のやり取りの中で Polixenes が冗談めかして言う女性は “devil”だという発言をかわした後で Hermione は次のように言葉を続ける:

Th'offences we have made you do we'll answer,
If you first sinned with us, and that with us
You did continue fault, and that you slipped not
With any but with us.(1.2.82-85)

男女が出会い結ばれることがすなわち罪を犯すことにつながるわけではなく、その2人の間に愛と信頼が持続し2人の間のみ男女の関係が成立するときには結婚の貞潔つまり“infancy”と密接な関係を持つ“innocence”が保持される。「信仰」はHermioneの“innocence”を信じ“innocent”なHermioneが生き返ることを強く望み、そうすることが彼女を死の手から取り戻すことだと信じることである。それは“Bequeath to death your numbness, for from him/ Dear life redeems you”(5.3.102-3)や“Do not shun her/ Until you see her die again, for then/ You kill her double”(5.3.105-7)という言葉と結びつきのある言葉である。Hermioneは彼女の貞潔が疑われ、彼女の“crown and comfort of [her] life”(3.2.92)であったLeontesの愛が失われその愛の結晶である子供たちも失われたときに気を失って倒れた。だからLeontesがHermioneの貞潔を信じ心から悔い改め彼女が生き返ることを気も狂わんばかりに望み、彼女が生き返ることを子供のように無心に信じ、その気持ちが伝わる時に病んだ精神を癒す音楽の調べに助けられて徐々に生き返ることができる。しかしLeontesに死んだ妻が生き返ることをいぶかる気持ちが残っていて彼女が動くのを見てあたかも化け物か何かを見るかのように後ずさりしたりすることはそれだけ彼女に生き返って欲しいと思う気持ちが弱いことを示しているのでせつかく生き返りかけたHermioneがまた亡くなり彼女を二度殺すことになる。2幕3場で穢れを知らない子供であったMamilliusはLeontesに彼の命の根源である母親が墮地獄の罪である不貞を犯したと聞かされて子供らしい“innocence”を奪われた。“innocence”を奪われたMamilliusは子供として存在し続けることを否定され、元気も食欲も安眠も失くしてすっかりやつれ、やがては死に至った。Mamilliusを殺すことで彼自身の中に存在する“innocence”をも殺したLeontesは暴君と化した。しかし妻子を失って初めてHermioneとMamilliusの“innocence”に気づいたLeontesが狂気の領域にまで足を踏み入れてHermioneを取り戻したいと思い、またHermioneが生き返ることを子供のように無心に信じるときに、換言するならば彼自身が“innocence”を取り戻したときに初めてHermioneと和解できる。

結び

臣下の一致した意見に耳を貸さず妻とBohemia王との関係を邪推したLeontesはMamillius王子に母が墮地獄の大罪である不貞を働いていたと告げることによって穢れを知らない子供であった王子の“innocence”を殺し彼が子供として存在し続けていくことを否定する。Mamilliusの“innocence”を殺した時Leontesは彼自身の中に存在する“innocence”も殺し暴君と化していく。Paulinaの目論見に反してPerditaの「無邪気な沈黙」でさえも邪推に凝り固まったLeontesの心を動かすことはできない。LeontesはAntigonusにPerditaをどこか異国の荒地に捨てに行くように命じる。王の命令に従ったAntigonusは熊に八つ裂きにされるがこの熊はLeontesの“brutality”を表す。神託の言葉を無視してHermioneに有罪判決を下そうとしたLeontesは神の怒りに触れ妻子を失う。妻子を失って初めてLeontesは自己の罪に気づき悔い改める。16年に及ぶ贖罪生活を送った後に神託の言葉が現実のものとなりLeontesは彼がAntigonusに命じて異国の荒地に捨てさせたPerditaと再会しさらには死んだと思われていた妻との再会も果たすことがで

きる。この劇はめでたし、めでたしで終わるが死んだ Antigonus と Mamillius が生き返ることはない。この2人の死は happy ending で終わる *The Winter's Tale* に暗い影を投げかける。「お姫様の命を救うためなら何でもします」という誓い通り Perdita の犠牲となって死んだ Antigonus は別にしても将来を有望視されていた Mamillius が劇半ばで死んで生き返ることがないことはとりわけ暗い影を投げかける。なるほど Perdita が王女であることが判明することは Mamillius に代わる王の世継ぎが見つかったことを意味する。しかし Perdita が自分の足で立って舞台上に登場するのは彼女が捨てられてから16年が経過した後であり、彼女は既に美しい女性に成長して Florizel と恋仲にある。このことは劇半ばで死んだ Mamillius が体現していた子供らしい穢れのない精神を Perdita がそのままの形で引き継ぐことはできないことを意味している。しかし Mamillius の精神は彼の死とともに劇半ばで葬り去られるのではない。それは形を変えて “I have heard it said / There is an art which in their piedness shares / With great creating nature” だからカーネーションや縞石竹は一茎だって欲しくないと思う Perdita の潔癖性の中に存在する “innocence” に引き継がれる。それはさらに毛刈祭りでそこに集った客たちを証人にしての極秘婚約に失敗した後で Bohemia 王に対して言う「王位相続よりも愛を選ぶ」という Florizel の言葉の中に存在する現世的な利益に目をくらまされることなく真実を見抜くことのできる “innocence” の中にも引き継がれている。そして Perdita と Florizel の中に存在する “innocence” に触れた Leontes は Perdita の中に若き日の Hermione を見た後で Hermione 生き写しの「石像」を見て大人としての妻の優しさの中に存在していた “infancy” を思い出されたときに彼女を激しく思慕する。人間の尊厳の象徴である理性を喪失して狂気の領域に足を踏み込んでまで激しく Hermione を求めるときに Leontes は彼自身が Mamillius の体現していた “innocence” の精神を獲得する。そして Paulina の指示に従い、彼女が執り行おうとする儀式が悪魔の力を借りたものでないことを信じ Hermione が生き返ることを強く望み、そうすることが彼女を死の手から取り戻すことだと幼子のように無心に信じたときに初めて Leontes は Hermione と和解することができる。

Antigonus が生き返らないのと同様、劇半ばで死んだ Mamillius も生き返らない。Hermione の顔に刻まれた皺と同様にそれらは Leontes の邪推が引き起こした災難の爪跡を記し *The Winter's Tale* に解決し得ない暗い影を投げかけていることは否めない。しかし Mamillius 自身は劇半ばで死んでも彼が体現していた “innocence” は形を変えて劇の中で受け継がれる。そこにこの劇の救いがあると言えるだろう。

注

1) R. A. Foakes, Shakespeare, *The Dark Comedies to the Last Plays: from Satire to Celebration* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 129.

2) Joan Harting, “The Tragicomic Perspective of *The Winter's Tale*,” *The Winter's Tale: Critical Essays*, ed. Maurice Hunt (New York and London: Garland, 1995) 190.

3) Howard Felperin, *Shakespearean Romance* (Princeton: Princeton UP, 1972)

226-27.

4) William Shakespeare, *The Winter's Tale*, ed. Susan Snyder and Deborah T. Curren-Aquino, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 2007) 5幕3場 132-35行 . テキストはこれを使用した . 以下このテキストからの引用は全て本文中に幕 , 場 , 行を記すにとどめる .

5) Robert G. Hunter, "Shakespeare and the Comedy of Forgiveness," *The Winter's Tale: Critical Essays*, 166.

6) Inga-Stina Ewbank, "The Triumph of Time in *The Winter's Tale*," *The Winter's Tale: Critical Essays*, 153.

7) Maurice Hunt, "The Labor of *The Winter's Tale*," *The Winter's Tale: Critical Essays*, 340.

8) Stephen Reid, "*The Winter's Tale*," *The American Imago: A Psychoanalytic Journal for the Arts and Sciences* 27 (1970): 271.

9) Dennis Biggins, " 'Exit Pursued by a Bear' : A Problem in *The Winter's Tale*," *Shakespeare Quarterly* 13 (1962): 8.

10) Northrop Frye, "Recognition in *The Winter's Tale*," *Essays on Shakespeare and Elizabethan Drama; in Honor of Hardin Craig*, ed. Richard Hosley (Missouri: U of Missouri P, 1962) 236.

11) Patricia Southard Gourlay は " 'O my most sacred lady': Female Metaphor in *The Winter's Tale*," *The Winter's Tale: Critical Essays* の中で *The Winter's Tale* における femaleness について議論している .

12) Edward W. Taylor, "Nature and Art in Renaissance Literature, Shakespeare's *The Winter's Tale*," *The Winter's Tale: Critical Essays*, 132.

13) Felperin, 223.

14) Carol Thomas Neely, "*The Winter's Tale*: The Triumph of Speech," *Studies in English Literature* 15 (1975): 331.

15) Martin Mueller, "Hermione's Wrinkles, or Ovid Transformed: An Essay on *The Winter's Tale*," *Comparative Drama* 5 (1971): 236.